



TITLE:

<大會抄録>イル汗國におけるモンゴル人

AUTHOR(S):

志茂, 碩敏

CITATION:

志茂, 碩敏. <大會抄録>イル汗國におけるモンゴル人. 東洋史研究 1982, 41(3): 601-602

ISSUE DATE:

1982-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153867>

RIGHT:

通しており、兩者の間には何らかの關係があるのではないかと考えられる。

本發表では、以上のような戰國時代の無内銅戈をてがかりに、楚文化の獨自性と、その朝鮮半島との關係について私見を述べてみたい。

モンゴル帝國におけるハーン位繼承と

怯薛體制

池 内 功

チンギス・ハーンがモンゴリアを統一する際、彼と主従關係によって結ばれた家臣團 *noġod* の果たした役割は大きい。一般に、*noġod* (*ol noġod*) は、遊牧戰士が舊來のモンゴル氏族制社會の束縛を離れて個人的に遊牧首領に服屬したもので、平時には遊牧首領の家人として家事労働に従事し、戰時には戰士として遊牧首領の基幹兵力となったとされている。チンギス・ハーンは、この *noġod* を主體に怯薛を組織し、自らの權力機關としたのである。怯薛の職掌は *noġod* の職掌を組織化したものであり、怯薛は、ハンの日常生活に對する様々な奉仕・身邊の護衛・家産の管理などに役割分擔してあつたほか、戰時には親衛兵としてハーンに従つた。やがて、チンギス・ハーン國が膨脹擴大してくると、ハンの側近に仕える怯薛の中からは、ハンの委任をうけて國政を擔當する者、千戸・百戸あるいはダルガチとして各地方の支配にあたる者が輩出し、怯薛は、モンゴ

ル帝國高級官僚出身母胎の觀を呈した。

ところで、問題は創業者チンギス・ハーンとの主従關係をもつ人材を要所に配置して發展してきた國家の體制が、チンギス・ハーンの歿後、モンゴル帝國において、いかに繼承されていったのかである。というのも、オゴタイ・グユク・モンケ・フビライの各皇帝は、ハーン位繼承以前に、それぞれ自らの *noġod* と怯薛を擁しており、即位後における彼らの怯薛と前皇帝の怯薛とのかねあいが微妙となるからである。そこで本報告では、ハーン位繼承と怯薛體制とのかわりを取り擧げて考察してみたい。

イル汗國におけるモンゴル人

志 茂 碩 敏

十三世紀の半ば、フラグの征服活動に従つたモンゴル帝國の西方出先機關「アーゼルバイジャン軍政府」、「ヒンドゥスターン・カシミール鎮守府」、「ホラーサーン總督府」の諸勢力とモンゴリアからフラグに同行してきた多くの部族軍はやむを得ぬ事情でイランを中心とする西アジアの地に留ることとなり、遠征軍の總司令官フラグを開祖とするモンゴル王朝イル汗國が成立した。必ずしもフラグ家に直屬しない様々の勢力からなる征服軍がそのまま居つて成立したイル汗國におけるモンゴル人達の構成は複雑で、彼等のイル汗國一代の動向は從來十分に解明されてはいなかったが、『集史』その他の史料から考證していくとだいたい以下のように整理される。

建國時の事情に根ざすイル汗國の分立的體質は、外敵の侵入を撃退した後、汗位繼承争いと絡む有力アミール間の政争という形で表面化し、十數年間の混亂状態が續いたが、フラグの曾孫ガーザーンは一連の政争の中心にあつた西方出先機關起源の軍隊の支配者その他の有力アミール達、彼等と結託して汗位を狙ひうる諸王達を徹底的に討つて子飼いのアミール達を中核とする統一政權を成立させた。

ガーザーン汗の歿後、彼の弟オルジャイト、その息子アブー・サイードへと汗位は移行し、彼等と姻戚關係にあるアミール達を中核にイル汗國は一應の安定をみていたが、ガーザーン汗の歿後三十年、フラグ家の正統が斷絶して諸勢力分立抗争の状態となり、事實上解體した。

イラン生活文化史への一視點

——ペルシア語の農業書をめぐって——

清水 宏 祐

サファヴィー朝時代に書かれた 'Ishād al-Zirā'a 「農業便覧」は、土壤の選定、種まきから説きおこし、八十餘種にのぼる野菜、果物を、その品種、銘柄ごとに特徴を分類し、さらに養蜂やチーズの作り方にまで及ぶ、まさに「種まきから口に入れるまで」を記述した體系的な農業書である。さらに本書には、イラン太陽暦の元旦（ノウ・ルーズ）が何曜日に始まるかによつて、その年の農事の吉凶を占う方法や、アラビア語の祈りの文句を紙に書き、棒の先に附けて

耕地の四隅に立てる豐作祈願の儀式など、現代の農村調査の報告書におけるような、生き生きとした描寫が見られ、當時の生活文化を考える上での恰好の材料を提供してくれる。この農業書を紹介しながら、その中に流れているギリシア起源の發想法や、アラビア語の農書からの影響について觸れるとともに、その背景となっているイランの自然條件の特殊性についても考えてみたい。

イブン・ファッラーとイブン・タイミーヤ

——中世のハンバリー派政治思想の展開——

湯川 武

スンニー派イスラームの法學の分野には、いずれも正統的と認められている四つの大きな法學派がある。四大法學派の中では、ハンバリー派はその祖とされるイブン・ハンバル以來、強烈な傳統主義的な立場、あるいは、いわゆる原則主義的な立場で知られている。

イスラームの學問體系にあつては、政治に關する議論は法學の一分野となつてゐる。したがつて、ハンバリー派にはハンバリー派獨自の政治論が存在していた。それは、先に述べたような同派の立場を反映して、イスラーム法をより嚴格に解釋し、それを社會で實施していくことが政治の目的である、ということを強く押し出している。とは言つても、ハンバリー派の政治論が歴史的に變化、展開してこなかつたというわけではない。むしろ、かなり重要な點で變化があつたことは明らかである。